



巻 頭 言

基礎工学部創立25周年に思う

片 山 俊*

大阪大学基礎工学部は昭和36年に創設され、今年が創立25周年に当る。この秋、11月22日に創立25周年の記念行事を催すことで目下準備が進められている。

基礎工学部はまず機械工学、合成化学、電気工学の3学科と、共通講座としての数理教室とでスタートした。最初は基礎工学部という名称がなじみやすく、「土建の基礎工事を教えるところですか」と間違われたこともあった由である。私自身「工学部の教養時代のことですか」と聞かれたりした経験がある。

現在は8学科と共通講座とで、58講座の世帯で、これは工学部の丁度半分のサイズであるが、阪大の中では工学部に次ぐ大きさである。「まとまりやすく、パワーの出るサイズですな」と言ってくれる人もあるが、実際そうあって欲しいものだと思っている。

私は昭和40年より基礎工学部にご厄介になっているが、その当時は既に6学科に増えており、かなり落ち着いてきた頃であった。それでも、やたらと会議が多く、また長く、教授会を夕食抜きで延々とやったこともあったと思う。学部創設前後はさぞかし大変な御苦心があったことと想像している。

「25年」と口で言うのは簡単であるが、指折り数えると結構な年月である。大学院修士

課程を終了するのが24歳であるから、年からして、やっと一人前になったところともいえる。しかし、私としては世の人にその活躍振りを期待されている元気一杯の若者と考えた

い。

この四半世紀の基礎工の歴史の中で最も強烈な出来事は昭和44年前後の大学紛争であろう。基礎工は封鎖され、流浪の民の生活を余儀なくされた。教授会の会場探し一つにも執行部は腐心されたようである。全く悪夢のようなものであったが、阪大50年史にも取りあげられているように、歴史はいつまでも消え去らない。

基礎工は大学紛争がほぼ終焉した昭和46年に創立10周年を迎えた。その記念行事に当って、基礎工創設の中心的役割を果たされた阪大の元総長であり、また元学部長の正田建次郎先生より次の言葉をいただいている。

「科学と技術の融合による科学技術の根本的な開発、それにより人類の真の文化を創造する学部。」

この言葉は基礎工学部の目指すべき所を要約されたものであり、私達はこれを座右の銘として基礎工学部玄関の壁に掲げている。

創立25周年を迎えるに当って、創設当時の基礎工学部の理念に思いをいたし、心を新たに科学技術の創造的な開発に向けて飛躍していかなばと考えている。どうか温かい目で見守っていただきたい。

*片山 俊 (Takashi KATAYAMA) 大阪大学基礎工学部、化学工学科、教授、基礎工学部長、工学博士、化学工学